

札幌市中小企業振興審議会

会 議 録

日 時 : 平成21年6月29日(月)10時開会
場 所 : 札幌市民ホール2階 第2会議室

1. 開 会

事務局（角田経済企画課長） ただいまから、札幌市中小企業振興審議会を開始させていただきます。

私は、経済局産業振興部経済企画課長の角田でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、本当に皆様お忙しい中をご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

それでは、議事に先立ちまして、経済局長の井上の方からごあいさつ申し上げたいと思います。

井上経済局長 どうも皆さん、おはようございます。

札幌市の経済局長の井上でございます。

上田市長は、あいにく公務が重なっておりまして、本日、出席できませんので、かわりまして私から一言ごあいさつを申し上げます。

まず、委員の皆様には、時節柄何かとお忙しい中ご出席いただきましたことを、厚く御礼を申し上げます。

ことし2月にリニューアルされました札幌市中小企業振興条例に基づく最初の審議会の委員をお願いいたしまして、3月に1回目の会議を開催させていただきました。この1回目の会議で、21年度予算の事業内容を委員の皆様にご報告するとともに、今後2年間の審議会の審議予定につきましてご説明をさせていただきました。

その中で説明いたしましたように、札幌市の企業の約95%以上が中小企業であるということから、中小企業の振興のためには、札幌市の産業全体の振興が不可欠であるということで、まずは札幌市の経済の将来的な発展を目指しまして作成いたします産業振興ビジョンについてのご意見をいただきたいということ、そして、若干、時期はダブりますが、ビジョンのアクションプランとして策定予定のものづくり戦略について答申をいただきたい旨、お願いしたところでございます。そして、本日は、この産業振興ビジョンにつきましての委員の皆さんからご意見をちょうだいいたします1回目の審議会ということになります。

6月の国の月例経済報告によりますと、景気は厳しいものの、一部に持ち直しの動きが見られるとされておりますが、残念ながら、北海道、札幌市の状況を見ますと、雇用を初めといたしまして、大変厳しい状況が続いているという実感でございます。この状況を変えていくためには、官民一体となりまして中長期の目標を立て、そこに向かってさまざまな取り組みを進めていくことが大変重要であると考えておりまして、その柱となりますのが産業振興ビジョンであります。

以上のようなシナリオでございますので、委員の皆様には、短い時間ではありますが、よろしくご審議をいただきまして、それぞれのお立場から幅広いご意見、ご提言をいただければと思っております。

以上、お願い申し上げまして、簡単ではございますが、開会に当たりましての私からの

あいさつとさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局（角田経済企画課長） それでは、大変恐縮ではございますけれども、座って進行をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

本日は、中小企業振興審議会委員 19 名のうち 16 名の皆様にご出席いただいております。ただいま、清水委員がまだお見えになっておりませんが、ご出席のご回答をいただいております。

なお、北海道経済部商工局長の大谷委員、北海道ニュービジネス協議協会理事の水澤委員、札幌消費者協会副会長の武田委員につきましては、本日所用のため欠席のご連絡をいただいております。

また、北海道経済産業局産業部長の大味委員、北海道経済部商工局長の大谷委員につきましては、人事異動に伴いまして新たに委員にご就任いただいておりますことをご報告申し上げます。

それでは、本日配付させていただいております資料についてご確認をさせていただきます。

資料は 5 点ございまして、まず 1 点目が、産業振興ビジョンの策定についてという資料でございます。これは、あらかじめ配付いたしておりませんで、本日追加でお渡しした資料でございます。それから、産業振興ビジョンの基本的な考え方、産業振興ビジョンの構成案、産業振興ビジョンものづくり戦略の策定スケジュール、札幌市産業の現状と課題等についてという五つの資料を配付しておりますが、もし資料がお手元がない方がいらっしゃいましたら、事務局の者にお知らせいただきたいと思います。

皆様、ございますでしょうか。

なお、本審議会は公開で行っておりますが、会議録につきましても、札幌市附属機関の設置及び運営に関する要綱に基づきまして公開したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。今回の会議録からホームページで公開したいと思っておりますので、ご理解、ご賛同のほど、よろしくお願いしたいと思います。

それでは、これより後の議事運営につきましては小林会長にお願いしたいと思いますので、小林会長、よろしくお願いいたします。

2. 議 事

小林会長 皆さん、おはようございます。

本日は、2 回目ということになりますが、既に第 1 回の会議でおおよそ産業振興ビジョンの策定に関しての説明をいただいております。本日の会議は、その大枠についてお話を伺うとともに、さらに内容を深めるために皆様からいろいろご意見を伺うというのが主な目的であります。

もう時間も限られておりますので、あいさつはこれくらいにいたしまして、早速、議事

に入らせていただきます。

それでは、議事に入らせていただきますが、本日の審議会の議題、札幌市産業振興ビジョンについて、まず事務局の方から説明をお願いします。

なお、皆様からのご意見、ご質問につきましては、説明が終了した後にお受けしたいと存じますので、ご協力のほど、よろしく願いいたします。

事務局（渡辺産業振興部長） おはようございます。

産業振興部長の渡辺でございます。

私からは、まず、お手元に配付してございます産業振興ビジョンの策定についてというA4の1枚物について、前はアウトラインの説明をさせていただいているところでございますが、改めまして、策定の趣旨の概要等について私からご説明をさせていただきたいと思っております。

恐縮でございますが、座って説明をさせていただきます。

まず、策定の趣旨でございますけれども、記載のとおり、もう皆さんご案内のとおり、私どもの社会環境が急激に変化しているということがございます。一つには、少子高齢化、あるいは環境問題、そして人口が将来的には減少していくということが予測されている中にありまして、さらには公共事業費の減少、縮減、地方交付税制度の見直し、縮減等々、本市を含めました地方経済に与える影響は極めて大きい状況にあるわけでございます。そうした中にごさいます、札幌市の経済が持続的に発展していくためには、これまで以上に中長期的な視点に立った戦略的な産業施策が必要であるというふうに考えているところでございます。

また、局長のあいさつにもございましたが、100年に一度の経済危機と呼ばれている状況でございますが、そうした中にありましても、先ほど申しましたとおり、本市経済が持続的に発展していくという意味合いにおきましても、いわゆる景気動向、あるいは公共事業に影響を受けないような足腰の強い経済基盤を確立する必要があると考えているところでございます。

また、平成19年12月に、皆様のお力添えをいただきまして全部改正をさせていただきました札幌市中小企業振興条例の第4条に記載されておりますが、市は基本的理念のっとり中小企業振興施策を総合的に策定し及び実施しなければならないというふうに規定しているところでございます。これを踏まえまして、産業振興ビジョンの策定に着手したいと考えているところでございます。

こうしたことを踏まえまして、これからでございますけれども、本市産業におけます現状分析、あるいは課題の抽出などを行った上で、今後、経済の活性化に向けまして中長期的に取り組むべき総合的な経済施策の方向性を明らかにし、産業振興ビジョンを策定してまいりたいと考えているところでございます。

また、この産業振興ビジョンのアクションプランといたしまして、ものづくり振興戦略を策定したいと考えているところでございます。いわゆるものづくり産業におきましては、

公共事業に大きく依存することなく、また雇用創出効果も極めて大きい、また関連産業も多いというような特質がございます。そういった意味合いからも、ものづくり振興戦略をアクションプランの一つとして策定してまいりたいと考えているところでございます。

続きまして、2番目に記載してございますが、ビジョンの期間でございます。期間としては、おおむね10年間を考えているところでございます。これが、今の本当に変わりやすい経済状況の中からはまずと極めて長い期間というふうに考えられるかと思えますけれども、私どもといたしましては、個別事業の施策立案に当たりまして、今後目指すべき経済施策の方向性を明らかにした上で個別事業の施策の打ち込みをしていきたいというふうに考えているところでございます。

策定手法でございますが、まずは中小企業振興審議会の委員の皆様方からご意見をいただきながら進めてまいりたいというふうに考えているところでございます。

また、策定にかかわる私ども市の内部の関係局でございますが、4に記載しておりますとおり、総合的な経済施策という観点から考えますと、まちづくり、集客交流産業や観光産業、あるいは医療福祉産業等々、さまざまな分野にわたってまいります。したがって、広く庁内関係部局の協議を重ねながら、経済局が中心となりまして策定作業を進めてまいりたいというふうに考えてございます。

また、これらに加えまして、その他道内出身または道内勤務経験のございます有識者、経営者などにも必要に応じましてアドバイスをいただきながら進めてまいりまして、総合的、多角的な視点から参考意見をちょうだいしながらまとめてまいりたいというふうに考えているところでございます。

また、5番目のヒアリング、アンケート調査でございますが、先ほど申しました現状の把握等を行うために、さまざまな形でのアンケートを実施してまいりたいと考えてございます。具体的な内容については、これからつめていきたいと思っておりますが、それらにつきましても皆様にお諮りしながら進めてまいりたいというふうに考えているところでございます。

概要につきましては、簡単ではございますが、私からは以上でございます。

事務局（角田経済企画課長） 続きまして、私の方から、産業振興ビジョンの構成案、それから産業振興ビジョンの基本的な考え方、札幌経済の現状と課題のこの三つの資料につきまして簡単にご説明させていただきたいと思えます。

まず、産業振興ビジョンの構成案からご説明させていただきたいと思えます。

今、私どもが考えておりますビジョンの構成としましては、5章立てで考えております。第1章がビジョンの基本的な考え方、ここではビジョン策定の趣旨、今、渡辺の方から説明がありましたとおり、このビジョンの趣旨をここできちんと考えたいということです。それから、2番目としまして、ビジョンの特徴です。ここは、札幌らしさ、札幌の文化とか歴史に根づいた産業振興をどのようにしていったらいいかという一つの特徴立てをここできちんとまとめたいと考えております。それから、ビジョンの期間としましては、おお

むね10年間、現在の想定では2011年から2020年までの約10年間のビジョンの期間というふうに考えてございます。

4番目ですが、ビジョンの位置づけとしましては、札幌の産業振興の方向性、大まかな方向性をこちらできちんとうたって、今後、10年間、どういう形で札幌の経済を振興していくのか、活性化していくのかといったことをここできちんと取りまとめたいと思っております。

第2章は、現状、課題と産業振興の目的ということで、現状分析、課題、産業振興の目的というふうに考えております。ここの内容につきましては、次の資料でご説明をさせていただきたいと思っております。

それから、第3章の施策の展開方向と必要な視点ということで、そこに書いてございますが、これにつきましても次の資料で内容をご説明させていただきたいというふうに思っております。

第4章の重点分野では、ものづくり振興、サービス業振興、中小企業の下支えにつきまして、これも第4章で分野ごとにきちんと今後の方向性を取りまとめたいと考えておりますが、こちらの内容につきましても次以降の資料で具体的にご説明させていただきたいと思っております。

そして、第5章としましては、資料編として、このビジョンの策定の経過、それから本日開催をさせていただいております中小企業振興審議会の審議内容、それからパブリックコメントの手续等について簡単に資料編としてまとめさせていただきたいというふうに思っております。

以上、この第1章から第5章までが、現在、私どもが素案として考えております産業振興ビジョンの構成でございます。

続きまして、次の産業振興ビジョンの基本的な考え方でございますが、先ほどございました第3章の施策の展開方向と必要な視点と第4章の重点分野について、こちらの資料に基づいてご説明をさせていただきたいというふうに思っております。

まず、産業振興ビジョンの基本的な考え方の中で、産業振興の目的、ここをまず最初に明確化する必要があるというふうに考えております。目的の第1点目は、まず雇用の創造です。これは、札幌の企業活動が活発化することによりまして、当然、雇用がふえ、市民の働く場所がふえる、こういうことをまず大きな目標に立てたい、目的にしたいということです。目的の第2点目は、企業就業者の所得増加ということで、企業の売上、就業者の所得をどう増加させるかということを中心に目的として設置したいということです。目的の第3点目は、市への税収増加による市民サービスの向上ということで、企業や市民の所得がふえることによって、税収が増加し、それによって市民サービスの向上、札幌のまちづくりへの寄与ということで、雇用の創造、所得の増加、そして税収の涵養という三つの具体的な目的をビジョンの策定に当たって明確にしたい。そして、最終的にビジョンの中にこれを大きな目的として最初に掲げたいというふうに思っております。

続きまして、先ほどの構成の中にございました基本的な方向性と必要な視点という右側の部分でございますけれども、まずビジョン策定に当たって基本的な方向性として二つ考えております。一つ目は、道内経済循環の拡大ということです。札幌の人口は190万人ということで全道の3分の1の人口が集中しておりますので、やはり、道内産品を190万人の市民がいかに消費、活用し、それによって道内の経済循環を高めることが重要です。札幌で消費することによって道内経済が底上げされ、北海道全般、そして札幌の経済が活性化されるという意味で、道内経済の循環をまず拡大させるというのが一つ目の方向性でございます。

二つ目の方向性としましては、外需型産業の育成ということです。これは、例えば北海道の産品を札幌で付加価値を高め、加工して道外に移出して、そして道外からの収入を高めるということで、やはり付加価値を高めることによって所得を高め、それで産業の経済の活性化を図るということで、いわゆる内需拡大と外需型の育成という二つの大きな方向性をまず定めて、そこからビジョンを考えて、そしてどう具体的に活性化していくかということを考えていきたいと思っております。

その場合の必要な視点といたしまして、現在、5点を私どもでは考えております。

まず1点目が、中小企業者等の創意工夫と自主的な努力の尊重ということで、札幌市内の事業所の9割以上が中小企業でございますので、そういった中小企業の創意工夫あるいは努力といったものをどう行政として支援していくのか、あるいは、それぞれどう連携していくのかという視点をまず持ちたいと思っております。

それから、二つ目といたしましては、経済的・社会的環境の変化に対応ということで、先ほどの渡辺の説明にもありましたとおり、環境問題、エネルギー問題、そして高齢化、少子化というように、国内状況、世界状況が加速度的に変わる中で、どのように企業として、あるいは行政として対応していったらいいのかという視点を持ちたいということです。

三つ目としましては、道央圏としての取り組みということで、やはり札幌が札幌のための経済振興ではなくて、やはり周辺市町村としてお互いの長所をもって短所を補完し合う、お互いに周辺市町村と連携し合って、いわゆる圏域という一つの広域圏で、道央圏で経済の活性化を図っていく、それによって北海道経済全般を底上げしていくということです。札幌市の経済振興ということもありますが、それは道央圏の経済振興を図って、それによって道内、札幌市の経済の活性化を図るという意味で、まず、道央圏としての取り組みをここで視点として持ちたいと思っております。

それから、国、道との連携ということで、当然、広域圏の連携の中では、北海道あるいは国との連携を保ちながら、北海道、札幌、そしてそれぞれの地域がどう活性化されていくかということをごきちんと考えていきたいと思っております。

最後ですが、北海道経済の牽引役ということでございます。先ほど申し上げましたとおり、圏域というふうに考えますと、札幌が道央圏という圏域で産業振興を図り、最終的にはやはり北海道を牽引していくという中で、北海道における札幌の役割をまず明確にして、

そして北海道を牽引し、それによって札幌の経済の活性化を図っていくと。お互いの連携と相互補完という意味で、北海道経済の牽引役をどのようにしていったらいいのか、どういう役割があるのかということをも明確に考え、視点を持ちたいと思っております。

そして、一番最後の下でございますけれども、中小企業の下支えということで、先ほど申し上げました札幌市内9割を占める中小企業をどう下支えするのか、それは融資金融制度相談、あるいは経営アドバイス、創業支援、雇用対策といったあらゆる分野において必要な施策をここで示したいと考えております。

具体的な重点分野といたしましては、左側に移りますが、ものづくり振興とサービス業振興ということです。ここは明確に区別しているわけではございませんで、それぞれの分野でそれぞれオーバーラップする部分もありますが、一応、便宜的に大まかにものづくり振興とサービス業振興ということで、左側の食産業からスポーツ産業までの分野について記載させていただいております。私どもとしましては、そこに書かれております産業を個々具体的な事業までというわけにはいきませんが、これからどういう方向で振興をしていったらいいのか、それぞれの産業を特徴づけていったらいいのかということをも、ここできちんと考えてまとめ上げていきたいと思っております。

続きまして、次の資料でございますが、策定スケジュールでございます。

実は、前回の審議会のときに、産業振興ビジョンのスケジュールにつきまして、今年度中に産業振興ビジョンを策定するというところで、一度、ご相談、お諮りさせていただいておりますけれども、その後、私ども内部で議論いたしまして、これは札幌の10年間の経済を考える非常に重要なビジョンということもございまして、今年度中にまず策定の素案について審議会の皆様ともしっかり意見交換をさせていただいて、中身をきちんと議論した上で、来年度にパブリックコメント、それから市民意見を反映させていって、来年の8月、もしくは9月にはビジョンを最終的に策定をしたい、完成させたいというふうに思っております。

それから、先ほど申し上げましたものづくり戦略という部分でございますが、これにつきまして11月ぐらいから中小企業振興審議会の皆様に諮問させていただきまして、来年末をめどに策定したいと思っております。ですから、産業振興ビジョンがどちらかといいますとマスタープランということで先行して議論をさせていただきまして、途中から同時並行になりますが、ものづくり戦略をいわゆるアクションプランというふうに位置づけて策定していきたいと思っております。いずれのビジョン、戦略につきましても、この審議会の皆様でいろいろとご意見をいただきながら議論していただき、そして策定していきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

それから、最後の資料になりますが、先ほどのビジョンの構成の第2章に該当いたしますが、札幌市産業の現状と課題等についてということで、札幌市の経済の現状と抱えている課題について簡単にご説明をさせていただきたいと思っております。

まず、2ページ目の下の方のグラフでございますけれども、これまでの札幌市の経済成

長は、右肩上がりの人口増加と重点的な公共投資、公共事業に支えられてきたということがございます。北海道の人口比率が全国の4.4%である一方、公共投資配分は全国の10%ということで、そういった公共投資に支えられてきて、これまで人口増加と公共投資の増加に伴って成長してきたという経緯がございます。しかし、これからご説明いたしますけれども、今後、やはり人口減少と、それから公共投資が必ずしも今までどおりかないという現状の中では大きな問題が出てくるというふうに認識をしております。

続きまして、3ページ目の上の資料でございます。札幌の基礎データということで、人口は190万人です。実は、5月に190万人を超えまして、6月1日現在の人口では190万2,000人ということで、190万人を若干上回っております。全国では第5位、全道での人口の約34%が札幌に集中しております。企業数にしましても2万3,000社、民営事業所7万3,000事業所、従業者数78万人、市内総生産としては約7兆円でございます。域際収支黒字というのは、札幌と札幌以外の部分での移出移入ですから、外に出すことによってお金がどんどん入ってくるという意味では、札幌は実は黒字でございます。ですから、札幌から外に物を出して、それでお金が入ってきて黒字なのですが、一方、北海道を見ますと、北海道と本州、四国、九州、沖縄といった、あるいは海外といった外との関係では赤字でございます。移入あるいは輸入が多く、原材料などをこちらから経費負担しているということで、赤字という状況でございます。

それから、人口でございますけれども、北海道は全国を上回る少子高齢化、人口減少ということで、そこは赤字の訂正ですが、2035年には121万人の減少と記載しておりますが、これは122万人でございます。申しわけございません。訂正をしていただければと思います。

具体的に国勢調査が実施されました平成17年の北海道の人口は563万人ですが、26年後の2035年は441万人と21.6%も減少になります。一方、札幌市ですけれども、札幌市は国勢調査が行われました平成17年の188万人、現在190万人ですけれども、2035年には176万人と12万人の減です。6.4%という北海道に比べるとほぼ横ばいではございますが、いずれにしても減少傾向にございます。

それから、高齢化ですけれども、札幌市の高齢化率は1月1日現在で19.3%です。ただ、2015年には、推計ですが、24.8%ということで、実は2015年には4人に1人、2035年には34.3%ということで3人に1人が65歳以上になるというふうに推計をされております。

続きまして、5ページでございますが、生産年齢人口につきましては年々減少をしております。総人口が横ばいである札幌市でも、生産年齢人口は、これもたびたび訂正で恐縮ですが、20年間のところを30年間です。30年間で30万人減少すると言われております。少子化が進んで生産年齢人口が減少する中で現在の経済を維持していくのは非常に厳しいです。具体的に申しますと、札幌市も平成17年は生産年齢人口が132万人でした。それが、2035年、平成47年には102万人で30万人減少、22.7%の減少

ということで、30年間で生産年齢人口、働き手が4分の3に減少していくというふうに推計されております。これから非常に厳しい局面を迎えるというふうに推計されております。

それから、次の6ページの資料でございます若年層の道外流出ということでございます。実は、札幌市の人口移動を見ますと、平成19年の統計では道内との関係ではいわゆる1万3,000人程度が転入超過ですから、どんどん札幌に来ております。ところが、道外との関係では、実は札幌からどんどん出ていっております。2年前の統計ですと約9,000人が、若年層だけでなく9,000人が道外に転出をしているということでございます。問題はそこにもございますが、20代の占める比率が非常に高いということが大きな問題でございます。平成19年の調査では道外の転出超過、転出がどんどんふえている中で約6割が20代でございます。20代の方が約6割を占めるという非常に厳しい状況でございます。その大半が首都圏に出ておまして、恐らく、これは推計でございますけれども、新卒者の雇用の問題、就職の問題ということで、多くの20歳代の方が道外に流出しているということです。

そのグラフが上のところでございますが、20代が非常に多く、下の方ではそれは増加傾向にあるというグラフでございます。

続きまして、7ページに行きますが、事業所数、従業者数も、特徴だけを申しますと、やはり2次産業が非常に少なく3次産業が多いというふうになっております。そして、従業者数、事業所数ともに実は減少傾向でございます。そこに赤い点線で囲われたのが2次産業ですが、札幌の場合は、全国、全道と比較しましても2次産業の比率が非常に低いという特徴がございます。

続きまして、事業所、従業者数の推移の8ページでございますけれども、先ほど申し上げましたとおり、この推移もともに減少傾向でございます。ただ、この中でも特徴的なのは、実は医療福祉産業の事業所の従業者がふえてございます。これは、恐らく介護保険制度導入によるいわゆるシルバー産業といったものがふえていることによって従業者、事業所がふえているというふうに推計しております。

続きまして、9ページ目の市内総生産のところでございますけれども、先ほどちょっと申し上げましたように、札幌市内の総生産でございます。こちらの方は、実は約7兆円でございますが、こちらのグラフや赤い方に成長率がありますけれども、実は総生産は毎年減ってきております。成長率も全国のプラス成長に比べて、赤いところですがマイナスになってございます。

札幌市は、7兆円の総生産というのは、どのぐらいの規模かというのはちょっとイメージしにくいのですが、例えば札幌の生産額を国におきますと、今、国連の加盟国は192カ国ございますけれども、第58位ということで、約上位3分の1に入る規模でございます。国で申しますと、ヨーロッパのルクセンブルグとほぼ同じ総生産でございます。ルクセンブルグは人口48万人ですので、世界1位市民1人当たりの所得が高い国でござ

います。その国の総生産とほぼ同じなのですが、人口が私ども4倍ございますので、国の規模としては大体ルクセンブルグと同じ世界58位ぐらいの規模でございます。

ただ、今、申しました市民所得という部分では、実は政令市の中で最下位という非常にこれも厳しい状況でございます。

それから、次の10ページ、地域現状分析ということでございますけれども、市内総生産の割合を国内総生産と比較いたしますと、やはりこの部分でも第2次産業が製造業、建設業といったところが入りますが、約14%です。全国で見ると約3割なのですが、先ほどの従業者数、事業者数だけではなく総生産額を見ても、いわゆるものづくりという第2次産業ではなくて、サービス業、飲食、宿泊といった第3次産業が中心となっているということがここ言えるかと思えます。

続きまして、11ページでございます。

最初の方でご説明させていただきましたとおり、域際収支という言葉がございますけれども、外と中とのやりとりということで、札幌市だけでは黒字ですが、北海道と道外では1兆5,000億円の赤字です。下にございますとおり、製造業という中で、特に移入超過、道外から道内に物を持ってきて、こちらからお金が外に流れていっているのが現状でございます。

その具体的なものを12ページにお示ししております。産業別ということで、ここは製造業の部分で移出が少なく移入が多いことをあらわしてございます。

続きまして、13ページの公共事業費も、先ほどご説明いたしました、公共事業費が年々減少しております、従来、10%以上であったのですが、最近では9%程度ということで、年々、公共事業が減少しております。

こういった現状の中で、それでは札幌の強みといったものは何かというところを14ページ以降に記載してございます。

札幌の強みというのは、やはり、道内人口の約34%を占める札幌ということで、いわゆる大消費地、それから高い労働力があり、豊富な資源環境、情報発信機能、それから、札幌では25の大学、短大、高専がございますけれども、そういった非常に知の集積がございます。それから、良好な都市イメージということで、今後、こういった札幌の強みをどのように産業振興に生かしていくかということが大きな視点になるかと思えます。

続きまして、15ページでございますけれども、これから解決しなければいけない課題としましては、先ほど来ご説明しております人口減少、高齢化の進む時代、これからどうこれを乗り越えていくか。それから、足腰の弱い産業構造、従来、人口増加によって支えてきた第3次産業と公共事業による第2次産業ということで、その足腰をどう強くしていくか。それから、実は北海道、札幌の強みを生かし切れていないのではないかとということで、いろいろな資源、イメージを有効活用しよう。北海道自体も総生産額で言いますと18兆円ということで、実はこれは人口470万人のシンガポールの国内総生産に匹敵する規模でございます。実は、これだけの経済規模がある地域なのですが、問題は中ですね。

今後、経済構造を我々がどう考えていかなければいけないのかというところでございます。そういった北海道の強みも生かして、札幌の経済を振興していくということが課題だと考えております。

それから、16ページの産業振興の方向性ということでございます。今、課題をどうクリアして乗り越えていくかということで、人口減少、強みを生かした産業の振興、そして外需獲得ですね。いわゆる道外との関係で申しますと、国内、国外を含めて外からどうやってお金を持ってくるかといった産業振興を考えていく必要があると思います。

産業振興の目的は、先ほど申しましたとおり、雇用の創造と所得増加、税源の涵養という具体的な目的がここで必要だと考えております。産業振興の基本的な考え方、外需産業と内需につきましては、既にご説明させていただいておりますので、こういった方向でこれから産業振興に取り組むべきではないかということで載せさせていただいております。

以上、簡単ではございますけれども、札幌市の産業の現状と現在抱えている課題についてご説明をさせていただきました。

以上でございます。

小林会長 ありがとうございます。

それでは、ただいま事務局から説明のありました内容につきまして、ご意見やご質問をお聞かせいただきたいと思います。

これは、札幌市全体の課題のほかに、委員の皆様が直接かかわっておられる、活躍しておられる各業界の現状や課題もあると思います。それから、そういった日々の活動を通じてお考えになっておられることがいろいろおありかと思えます。そういった経験等を含めてご意見をいただき、また提言をいただきたいと思います。そういうものをいろいろお聞かせいただいた中で、今説明されたようなビジョンの作成に向けての中身をもう少し深めていくという方向で進めていくことになろうかと思えます。

早速、いろいろご意見、ご質問をいただきたいのですが、先ほど一番最初に、産業振興ビジョンの策定の趣旨やその手法、どんな形でこのビジョンの策定を進めていくか、おおよそのスケジュール等のご説明が渡辺部長からありました。これにつきまして、何かご質問ございますか。

全体の大枠はよろしいですか。

どうぞ。

三神委員 他の政令都市の産業ビジョンは参考にしますか。いろいろ出てきていると思うので、その辺のところも考えていただくということですね。

それから、札幌らしさを特徴とするということで特徴を出していただくのは大変ありがたいのですが、今までの産業振興ビジョンのようなありきたりのものをつくってほしくないと思います。事務局には大変課題が大きいと思いますけれども、私はそう思いません。本当に札幌らしいという感じのもので、中身もいろいろ濃いものをつくっていかないと、結局、ビジョンをつくったけれども、実践のところでは全然関係なくなってしまうと。

10年もやろうというのですから、10年先というのは大変なことだろうと思うのです。この辺のところをしっかりとらえていただきたいなという感じがします。

以上です。

小林会長 ただいまの意見についてコメントございますか。

事務局（渡辺産業振興部長） 今、三神委員からお話ございましたように、他の政令市におきましても、名称はそれぞれ違っておりますけれども、中長期計画を定めているところもございます。私どもも、そういったものはもちろん参考にしながらこれから策定作業を進めていきたいと思っています。

それから、まさに札幌らしさというものを10年間という期間の中でいかに持ち続けるかというお話だと思いますが、それにつきましても、今回、我々も全庁的な体制のもとで、これは経済局だけではなくてまちづくり全般にかかわる大きな課題だと思っているところでございますので、そういった総合的な観点を盛り込んで経済対策として、また理念的なものとしてまとめていきたいと思っています。

小林会長 ありがとうございます。

よろしいですか。

どうぞ。

山下委員 大枠のビジョンが10年間ということではわかるのですが、これが10年間という非常に長い期間なのです。

そこで、お願いの前に先に言いますと、ものづくり戦略という形でブレークダウンした形でアクションプランとしてやっていかなければならないというところで、ビジョンの中ではいろいろあると思うのです。例えば、消費的なところをもっと拡大するとか、サービスの形で札幌市に持ってくるとか、いろいろなまちづくりがあると思うのです。ものづくりにもう既に向かっているというとらえ方でいいのかどうかというところが一つです。個人的には、その方がいいかなと思っています。

それとは別に、10年というのは非常に長く感じます。恐らく、定性的なところに関しましては10年を見た形でこういうふうに行きましょうということだと思いますけれども、なるべくというか、ぜひとも定量的な数値目標を設定していただきたいのです。できれば、3年ごとに評価反省ができて、若干の是正ができるような定性的な目標設定自体がなければ、恐らく、10年たったときに審議委員の皆さんがほとんどだれがつくったのだろうという形でしかなくなって、やはり責任を持った形では3年ぐらいが妥当性があると思っていますので、お願いしたいと思っています。

小林会長 ありがとうございます。

今のことはいかがでしょうか。

事務局（渡辺産業振興部長） まず、ものづくり戦略ということについてのお話でしたが、私どもといたしましては、ものづくり戦略、いわゆる製造業というイメージ的に狭い範囲ではなくて、IT分野も含めた、先ほど角田の方からも説明がありましたと

おり、広い意味でものづくり戦略ということでとらえていきたいと思ってございます。そして、外需獲得効果が極めて高いと思っておりますので、そういった意味で、個別計画として、アクションプランとしてまず策定していきたいと思ってございます。もちろん、それ以外の施策もなおざりにするわけではございませんで、これは中期計画であります新まちづくり計画や、単年度予算でもいろいろな施策を展開しているところでございます。

あとは、定量的なお話がございました。3年ごとにというお話もございました。基本的には10年の目標期間ということになりますと、我々として考えるのは、定量的な数値をもって目標を定めるといのはなかなか難しいところがあるかと思ってございます。ただ、先ほども申しましたとおり、私ども札幌市としては、中期計画として新まちづくり計画などの4年ないし3年の計画を持ってございます。そういった計画展開もこれから継続的に行われていく予定でございますので、これは定量的な目標を設定して進行していくということになります。そういう観点から進捗管理もしていきたいと思っております。私どもとしては、そういった個別施策の立案に当たりまして、今回策定したいと思っております産業振興ビジョン、あるいは、ものづくり振興戦略を念頭に置いて策定していきたいと思ってございます。そういった観点で定量性の把握はしていきたいと思ってございます。

小林会長 よろしいでしょうか。

まだ、細かいところを議論すればいろいろ問題があるかと思っております。これは、細部にわたって、例えば札幌市の経済の現状をどう把握するかということでも問題がなくはないと思うのです。しかしながら、ものづくりというのは非常に重要な戦略だというふうにかなり最初の段階で規定されて、方向性を打ち出そうとされていると思っております。それはそれで結構だと思うのですけれども、それを補完するような話というのは、もう少し詰めた議論が後に必要になるかなという気がしております。

全体の大枠についてご意見はございましょうか。

策定のやり方として、この会議でいろいろな意見を集めるとか、それから庁内の関係各局、各部からいろいろ議論を積み重ねるとか、それから、いわゆるヒアリングとかアンケートの調査ということを総合しながら全体を作成するという手順で、10年間先を見通しながら、この日程に従って進めていくというのが大体の大枠でした。

最初の三神委員のご意見は、その際、手法の中でもっとつけ加えるべきこと、そういうものがあつたわけではないのですか。

三神委員 先ほどの回答でいいのです。ただ、札幌らしいなというものもあるのですけれども、自治基本条例がございましたね。我々はあの活動をやっているのですけれども、全国で札幌市の自治基本条例は物すごく評判がいいのです。だから、産業振興も評判のいいものをつくってほしいなと思っております。

あれはすばらしいです。やるかどうかの問題で、あの文章と中身は物すごくいいというのが我々の評判です。ですから、ぜひそういうふう期待したいなと思っております。その辺の兼ね合いと札幌らしさを本当に具体的にどういう表現で来るかという、その辺のどこ

ろだと思えます。特徴をしっかりとらえて、ありきたりのものではないものをつくってほしいということをお先ほど言いました。

小林会長 わかりました。

では、全体の大枠とか手順はこういうことで、また何かございましたら後からいろいろご議論いただくとして、中身について、どこからでもよろしゅうございます。あるいは、札幌市の経済の現状の分析や解釈、どういうところに力を入れようかという話など、どの点からでもよろしいですから、皆さんからのご意見を伺いたいと思えます。どなたからでもどうぞ。

平野委員 ものづくり振興が非常に重要だということは、もう皆さんどなたも感じていらっしゃると思うのですが、実は、ものづくりというのは非常に参入にお金がかかります。ご存じのとおり、皆様も本当にご案内のとおり、北海道は伝統的にこれといった技術が非常に少ないわけで、もともと国も施策としてものづくりには力を入れてきませんでした。札幌市も発寒とか新川とか産業団地を抱えていらっしゃるのですが、実はなかなか厳しい企業さんが多いです。

なぜ厳しいかということですが、道内の需要が少ないということもあるのですけれども、もともと道内にこれといった機械製造業、機械をつくるメーカーがない、プラントメーカーがないということがあるのです。食品産業は小規模なところが多いので、いろいろ工夫されて参入されているところが多くて、北海道と言えばおいしい食品がいっぱいあるというようになってきていますが、それ以外のところはないのです。機械をつくるプラントがないということです。それから、油とか、関連の薬品もないです。それから、サポートする人がいない、技術者がいないのです。ですから、機械を設置したはいいけれども、壊れたときには、本州、特に関西圏の人を雇って来て直してもらおうということで、非常にお金がかかるわけです。設置するにもかかるし、設置してからもかかるということで、中小企業者、製造業の方は非常に苦労されているので、その辺のサポートも含めて、今後、どう考えていらっしゃるか、何かお考えがあればお聞かせいただければと思えます。

事務局（渡辺産業振興部長） 平野委員がおっしゃるとおり、製造業は設備投資に莫大なお金がかかるというのはもちろんでございますけれども、それらの点も含めて、今、製造業のものづくり産業の方々が抱えている課題、認識といったものをアンケートなどを通じて、あるいはヒアリングなどを通じて、改めてこれからお聞きした上でそれを施策にどう反映できるかも含めてご提案させていただければなというふうに思っています。

ちなみに、18年度に製造業等に関するアンケートを実施いたしましたので、その際には、例えば新技術開発とか、企業間ネットワークの構築とか、今おっしゃられたような人材育成に関してのニーズが非常に高いということもございましたので、それに対して19年度から支援メニューも設けて、いわゆるものづくり産業の支援、施策の展開をしているところでございます。また、今後も改めまして、そういったところをどう展開すべきか、これから検討してまいりたいと思っております。

小林会長 どうぞ。

三神委員 先ほど、2ページ目の産業振興ビジョンの基本的な考え方のところでお話がありました。重点産業のものづくりとサービス業の振興と二つに分けて、これは仮にこういふふうに分けたのだという話は聞いておりますが、例えば社会的なトレンドをもう少しとらえて、環境とか、安全とか、健康なら医療の問題とか、介護の問題も含めて、ものづくりもそういうような方向性を持つ必要があると思います。結局、今まではそういうものを買おうと思って札幌にはないのです。地場産業が育成されないものを全国に売るとなれば、やはり、そのニーズというか、今のトレンドにかなうものをつくらないと、従来型の物ばかりつくっても売れないということになります。

それから、ものづくりには、いろいろな要素を加えて、サービスを加えていかなければならないということがあります。

私のところは卸ですけれども、実を言うと、卸屋がつくっている部分が相当あるのです。これはデータに入っていないはずで、そういうふうには、卸は製造業の方に行きますし、小売の方にも行ってしまうわけです。やろうと思えば両方やれるのです。中抜きだと言いますけれども、中を中心にやればできることなのです。そういうことをひとつとらえると、この枠組みを余りはっきりさせない方がいいのではないかと思います。

物をつくるにしても、本当にサービスにかなうようなものをつくってもらわないと売れません。今、木原課長と私のところの卸商連盟で今やらせてもらっているのは、皆さんご存じのように、「北海道キラリ品いっぱい卸隊」です。結局、道内の製造業と我々の卸売業のマッチングを今年かけてやろうとしています。結局、製造業がつくっても売れないのですよ。売り方がわからないとか、ロットで出さなければなりませんから、そのロットのとき資本力が要るわけです。そのときに、金融機関がその小さな企業に貸すかといったら、貸さないのです。そうすると、それを全国ネットで売れる商品であればどういうふうにするか、その辺のマッチング事業がどんどん出てこなければ、結局、外へ物売っていけないという状態になります。この辺のところをしっかりとらえたビジョンづくりというか、ものづくりをしっかりとやらなければいけないと思います。

以上です。

小林会長 よろしいでしょうか。

今のお話は、一つはものづくりとサービスということで、どちらも問題として特徴的だから出されたのだらうと思うのですが、産業分類にしたって、はっきり製造業の多くなっている部分を、実は卸が担っていたりということがたくさんあります。

どうぞ。

事務局（渡辺産業振興部長） 今のお話で、ちょっと補足といいますか、コメントをさせていただきます。

まさに三神委員がおっしゃられるとおり、ものづくり振興、サービス業振興と区分けしているのは、そんなに明確な区分けではございませんで、それぞれ補完的な構成だという

ふうにご我々も認識しております。というのは、今まさに三神委員が例示されました福祉の道具一つとっても、昨年度も我々のものづくり産業の支援メニューの一つにありましたけれども、ユニバーサルデザインの福祉産業で使われるような介護器具を製造業の皆様が開発するための支援を行うといったものもございまして、これは政策的にも相互に補完し合うべきものというふうに思っております。

あとは、まさに製造業の皆様が開発された製品がいかにか売れるかということも、おっしゃられるとおり、販路の確保なども含めていかに支援すべきかという必要性は認識しておりますので、その辺も、これからいろいろなニーズの把握等の中で改めてまとめさせていただきたいと思っております。

小林会長 今、二つくらい大きい話が含まれていたと思います。一つは、大きな時代のトレンドのようなものがあって、時代の流れに即して、札幌市の将来、産業をどういうふうに見ていくかという大きい問題があるわけです。何も世の中の動向にそのまま従わなければいけないということではないけれども、やはり時代の趨勢ということを念頭に置く必要があるのだらうと思っております。ですから、環境とか安全とか福祉とか、そういうことが絶えず意識の根底にあった上で、それとの関連で札幌の産業ビジョンを考えるという見方がもうちょっと前面に印象づけられた方がいいのではないかと考えております。

では、ほかにも具体的な中身について皆さんいろいろご意見があるかと思っております。どうぞ。

小仲委員 アクアグレースの小仲でございます。

私どもは中小企業といっても零細企業ですけれども、今回の策定の関係局部として、区はどのような形でかわってくるのかということが1点です。

それから、三神委員もおっしゃっていた札幌らしさとは何なのでしょう。皆さんの中に札幌らしさについて明確にお答えになれる方がいらっしゃるのでしょうか。そのために、今、産業振興ビジョンの札幌らしさということを三神委員がおっしゃったのだと思うのです。

今回、実態として、市にしても、私ども民間にしても、本当に札幌がどういう機能で動いているかということをご存じなのでしょう。例えば、私は今、札幌市のご支援でさくらんの農業学校に行かせていただいておりますけれども、農業学校へ行くにつれ、いつも思うのは、パークゴルフをなさる皆さんが9時の開門を待って、車をずっと何台も連なって待っていらっしゃるのです。北海道は冬が長うございます。その中で、せっかくこのいい気候の環境の中で9時まであかない、随分むだだなと思っております。6時か7時に開けて差し上げれば、その管理者として雇わなければならない雇用の創出にもなるし、施設の活用にもなり、経済も大きく膨らんでいきます。

皆さんが、そういった実態をどれほどごらんになっていて、認識していて、それをわかった上で今後ビジョンをおつくりになるのか、私にはちょっと理解ができません。本当は、もうちょっと小さな積み重ねが大きな札幌市をつくっていくのではないかと考えております。

そのために、ヒアリングなり、細かく奥の深い内容のあるアンケートをとっていただきたいのです。私どもにもたまにいろいろな部署からアンケートが来ますけれども、本当に帯に短したすきに長して、このアンケートで何を聞きたいのか、どんな回答を求めているのかというものが多いのです。

ですから、本当に10年かけての先行きのビジョンをつくる上で、札幌らしさを考えるのであれば、本当に大企業ではわからない、中小企業、零細企業だからこそ、それも嘗々脈々と時代を重ねて経営を重ねてきたところにこそ、いい意見も、また欲求不満の意見もあると思うので、そこら辺の実態調査や意識調査をかなり深く掘り下げてやっていただければ、私は良い札幌になっていくのではないかと思います。三神委員がおっしゃった札幌らしさというのはそこら辺からつくられていくような気がするのですけれども、いかがなものでしょうか。

事務局（渡辺産業振興部長） まず、区の関与のお話でございますけれども、今現在は区というものは想定していません。ただ、今後、その展開に当たりまして必要な場合はもちろん参画していただきたいと思っています。また、区の取りまとめ局として市民まちづくり局がございまして、今回はそちらの方が参画することになっています。区は地域振興部が所管してございますが、そこも必要に応じて入っていただきながら、今おっしゃられた札幌らしさも含めた関与のあり方もどう内容的に含まれるかということ想定しながら検討してまいりたいと思っています。

また、アンケートのお話も出ました。札幌らしさというのは、市長政策室政策企画部の方で所管しております創造都市さっぽろという事業もございまして、私どもの方では札幌スタイルという札幌のライフスタイルをデザイン化した製品を売り出そうという事業も実施しておりますけれども、それぞれいろいろ考え方とかあらわし方の違いもあります。ただ、そういったものを、今、この産業振興ビジョンの中で総合的にどこまで一般的なものとして、また考え方として取り入れていくことができるか、それもこれから検討させていただきたいと思っています。ただ、おっしゃられるとおり、アンケートについては、無意味にならないような、あるいは、今後10年間にわたるようなものということで、今、小仲委員からご指摘のありましたこともございますので、その辺も十分踏まえて考えてまいりたいと思っています。

小仲委員 ありがとうございます。

区の関与をお尋ねしたのは、今は地域振興、地域が活性化しなければまち全体が活性化しないと思うのです。そのときに一番地域を把握しているのは区です。本当は余り把握していただきはしないのですけれどもね。でも、本来は区がその地域、エリアをまとめて把握していて、地域活性化がなければまち全体の活性化はないと思うのです。ですから、私は、区の方に深くかかわっていただきながら産業ビジョンを策定していただけると、本当の意味での札幌市の下から起き上がってくる、地域から起き上がってくる活性化になると思うのです。

また、地域が持っている財産的なすばらしい資源もたくさんあると思うのですが、そこら辺はなかなか表に出ない部分であったり、私も補助金をちょうだいして応援していただいています、そのやり方さえわからないような方も結構いらっしゃいます。それが、区であったり、町内であったり、その地域おこしが大きく動けばまちは動くと思うのです。ですから、ぜひ区の意見もたくさん参考にしていただければ、小さなエリアで、町内がまとまった区がまとまって、札幌市全体が活性化することにつながると思うので、そこに大きく期待させていただきたいと思います。

ありがとうございました。

小林会長 何かお答えになりますか。

事務局（渡辺産業振興部長） 今のお話を受けまして、区全部が参画しますと10区ございますので、先ほど申しましたように、これは取りまとめ部として市民まちづくり局の地域振興部が所管してございますので、そこも今回の関係局部の中に入るような形で調整を進めていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

小林会長 よろしいでしょうか。

この報告書は、先ほどいろいろ説明をいただいた中で、非常によくまとまっていると思いますが、国や道との連携とか、北海道の中における札幌の位置とか、全道の経済に対して札幌がどんな役割を果たしているかという大きい話をいっぱい書いてあるわけです。けれども、具体的に経済の活性化を図っていくという話になってくれば、今、おっしゃられたような個別が大変必要になってくると思います。ただ、ビジョンというのは非常に大きな話だから、そういうビジョンを作成するに際して、先ほど具体的な例に挙げられたような種類のことをどういうふうに反映させていくのかというのは、策定する具体的な段階で出てくることかと思えます。

しかし、いろいろなヒアリング等を通じて様々な意見を集める際には、ぜひ今おっしゃられたような地域振興とかいろいろなところが相互にかかわられてはどうかと思います。

ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

三神委員 もう一つ、ものづくりについては、ものづくりのときにいろいろ話をします。

今、ものづくりしても、サービスにしても、それでは札幌市は世界一なのか、世界一番で売り込みができるのか、観光にしてもお客さんが来て世界一のサービスができるのか、ぜひこのビジョンの中に世界一というのを入れてほしいのです。そうでなかったら、品物が世界一のもでなかったら海外で売れません、競争が激しくて。だから、日本の国で売れるということは世界で売れるということです。道内では売れても本州では売れないというのは世界一になれていないということです。それだけ日本人の見方は厳しいです。私も道民ですし札幌市民なのでのんびりしていますが、この辺の気合を入れるビジョンをつくってほしいなと思います。世界一です。

小林会長 どうぞ。

山下委員 SiUの山下と言います。

ものづくりのところで少し話があると思うのですが、実際にもものづくりという言葉の中からイメージするものは、恐らく、個人、個人で相当違っていると思いますので、その意味づけを共通理解しないと話が食い違ってしまうのだらうと思うのです。

例えば、現状と課題等についての7ページで言っている第2次産業というのは、まさしくイメージは川崎とか、海の近くにある工業地帯です。これをどうするのと言ったって、札幌市を大工業地帯にするなんてことはだれも考えていません。

また、ものづくりの比べ方の中で、例えば10ページで言いますと、私が入っているのはIT産業ですけれども、サービス産業に入ってしまった。これはこれで大切なのですけれども、それをもとにした形で、最初の2ページの基本的な考え方ということで、ここも重点産業という形で、サービスとかものづくりという形で持ってきてしまうから、どこにもものづくりというものがあるのかという共通認識をなかなかとれない形になっていると思うのです。

私は、個人でいきますと、新しい可視化できるものというところのものづくりもあるし、もう一つは知的なところで、可視化できないけれども、仕組みという形のものがあったり、バーチャル的な形のものがあったりしますので、それが複合的に絡み合っただけで新しいものができるとか、そういう形のものづくりという考え方自体まで広げた方が札幌らしいのだらうと思います。ただし、ぼやっとやっただけではどうしようもないので、アクションプランのところでそれをきちんとイメージ化した形でプランができれば、非常にいいものができるのではないかと思います。ぜひとも、議論の中ではものづくりのイメージ化というところ自体は少し共通認識をとった形で進めていただければと思います。

小林会長 どうぞ。

事務局（渡辺産業振興部長） 今おっしゃられたとおり、先ほどご説明申し上げました現状と課題等についてのレジюмеでは、産業分類表示上のある意味では狭い分野の製造業の数字でございます。

我々の考え方としては、山下委員もご指摘されておりますとおり、札幌市自体、この産業分類上であらわせる製造業そのものは、産業構造のシェアは非常に低い状況でございます。したがって、私どもとしては、まず面的にとらえるのは、札幌だけではなくて、先ほど角田もお話しましたように札幌圏という中で広くとらえていきたいと思っています。また、業種的には相互にもものづくり産業と関連し合う業種ということで、先ほどもご説明させていただいた資料の中にありますとおり、バイオ産業とか、情報メディアの中のITコンテンツ、印刷といったものも含めて広い意味でとらえていきたいと思っています。これは、まさにこれから皆さん共通認識のもとでしっかりとした振興戦略をつくっていきたいと思っていますので、これも私どもの方で考え方を整理した上で皆様にご提示して、その点の共通認識化を図っていきたくて思っておりますので、よろしく願いいたします。

小林会長 よろしいでしょうか。

ほかにかがででしょうか。

池田副会長 私も、ものづくりといいますが、食品をつくっている会社の者です。例えば、私は札幌物産協会の会長をやっているのですけれども、これは、主に北海道の食品を道外のスーパーとか流通関係に販売する、いわゆる北海道物産展の窓口になっています。

実は、この間、これが何十年も続いている中で初めて気がついたことは、では、北海道物産展は本州にどれだけ売っているのだろうという話になったのですが、ほかの町も合わせてみると大体200億円ぐらいあるのです。でも、これは少ないのではないかと、1,000億円ぐらいにまで持っていけないだろうかという発想になったわけです。

そこで、もう一方、もうちょっとかかわっている舞台で言いますと観光協会がありまして、ここは数値目標がほとんどないのです。これもかかわって初めてわかりまして、びっくりしました。例えば、北海道に東南アジアから30万人来る、その計算は幾らか、それに対してどうなるか、では、それに対してどこまで目標を設けようかということになるわけです。今はそのメカニズムがなかなかうまくいっていない。

つらつら考えてみるに、私はこの会に出て初めてわかったのは、皆さんの話を聞いても行政にお願いしているような感じですが、私は自分のことととらえています。自分たちの産業が、自分たち自身がこの地域でどれだけのものでつくり続けたらこのエリアは豊かになるのかという視点に立ったときに、皆さんからのご質問の視点が違うと思うのです。むしろ、答弁するのは我々で、それに基づいて行政の方がまとめていってくれる、その発想が随分違っているような気がします。私たちが主体であって、それをまとめてくれるのが行政の方たちだという認識に一度立ちませんか。そうでなければ、いつまでたってもミスマッチになってしまうと思うのです。

そこで、私がきょう聞いた中で一番印象に残ったのは、ルクセンブルグが7兆円で大体似ているということです。ルクセンブルグはそんなに大きなまちではないのです。一方、スウェーデンとか北欧では、北海道と同じ人口で、携帯も、H&Mも、いろいろなものが域際収支が合っているのです。そうすると、この北海道でどのくらいの数値を設けたらいいのか、そのところをしっかりと目標を設けて、例えば物産展で言えば1,000億円やりたい、その一つから職員は変わるのです。うちの会社も、今は十何億円ですけれども、20億円にしたいと言った途端に仕組みも全部変わっていくのです。

では、この世界で、私たちは人口1,000万人ぐらい住めるようにしたいと、私は常に思うのです。そうすると、本州に物を売らなくても、私たちは自分たちで物をつくって、この地域で売って、この地域で産業ができて、機械もできるのです。人口が少ないから本州から物を持ってこなくてははいけないのです。なので、私たちがどう思うかということをはっきりと行政に問われていると思うのです。私は、例えば人口1,000万人が住むにはどうしたらいいのでしょうかということ投げかけてみたり、あるいは、域際収支が合うために、今、70兆円ぐらいこの地域でやろうというところから、何か物事が生まれてくるのではないかと、いうふうには私は思います。

その意味では、例えばルクセンブルグが7兆円だったら、どんな産業で7兆円をつくっているのか、もし可能であれば知りたいと思います。あるいは、デンマークも、どのくらいの産業構造で、出荷額で、どのくらいのことをやっているかということがちょっと見えてくると、私たちの羅針盤ができるのではないかと考えています。

そして、今、皆さんが言ったように、世界ナンバーワン戦略を考え、それが世界ナンバーワン戦略になり、しかも札幌らしさという地域の細かいことから積み上げていくといったことをぜひ皆さんで考えて、それを行政にぶつける、行政は困ったなというくらいぶつけるようなものを持っていけるような委員であればいいなというふうに私は実は思っております。

例えば、域際収支で、自分たちのエリアの中で商売した場合は税金10%まけるといったら行政は困ると思うのですが、言い続けたいと思うのです。そんなことから新しいドラマが始まっていくのではないかと私は思っています。そういう意味で、他人事ではなくて自分たちのことだというふうにとらえて私は発言をしていきたいと思っています。こういう場を与えてもらってありがたいなと思うと同時に、責任も感じますし、やりがいもあるし、やってみたいなと思っていますので、もっとでかい話をいろいろしていただければありがたいなというふうに思っております。

とりあえず、議論が分断してきたので、また一回戻ってもらってというふうに思っておりますので、お願いしたいと思います。

小林会長 よろしいでしょうか。

細かいいろいろな具体例に基づいた話とかいろいろあると思いますが、基本的には札幌の戦略ですね。どうあったらいいかというところの考え方は、やはり、よくしたいという点は皆さん共通しているわけでしょうからね。

今、池田副会長がおっしゃられたことにも関連するのですが、現状の把握はある程度共通認識を持っていた方がいいかなと思います。せっかく、今、域際収支の話とか総生産額の規模がルクセンブルグと一緒にというような大枠の話が出た中で、このとらえ方として、ものづくりが大事だという議論とどう結びつくかということがあるので、細かい話で申しわけないのですが、域際収支を論じた11ページがありますね。現状と課題の中の域際収支のデータは産業連関表からとったわけですね。実は、ここで北海道と札幌市の関係をよく見ると、実は札幌市の域際収支はプラスなのです。ところが、北海道は1兆5,000億円も赤字ですというお話をなさっているわけです。それはいいのだけれども、北海道の中で札幌がどういう役割を果たしたらいいかとか、北海道経済の牽引役を務めなければいけないというお話をしているわけでしょう。そうすると、実際に北海道の中でどんな役割を果たしているのかというところを見ると、実は商業部門とサービス部門で2兆円移出超過しているわけです。しかも、道内に向けてです。製造業で移入超過1兆6,000億円なのです。その差額が四千数百億円、それで域際収支黒字だと言っているのです。数字で見ると、そういう実態なのです。それが札幌の経済の現状なのです。

ですから、本当は、それで北海道経済の牽引車になるのかということがあるのです。北海道内に物を売って域際収支が黒字だと言っているわけなのです。しかも、商業部門で黒字になっているという形をとっているわけです。そういうような経済の構造だということは見ておかなければいけないのです。だから、余りいい話ばかりではなくて、政令指定都市中1人当たり市民所得が最下位であるという実態をよくよく認識した上で、しかし、先ほど来、札幌らしさという表現あって、何をもって札幌らしいと言うかはいろいろな議論があるけれども、そんな状態なのに日本全国でアンケート調査をして、どこに住みたいかとか、どこに行ってみみたいかというところ、札幌がナンバーワンなのです。一番住みたいまちに札幌が出てくるわけです。それも事実なのです。

私たちは、札幌に住んでいて札幌が大好きだと思ったり、いいところだと思っているけれども、それが現状だという基本のところを認識した上で、しかし、経済はこうなのだということがあるわけです。こんなに人気があって、いいところだとみんなに言われているのだけれども、経済の実態はそうなのです。だから、やはり産業をしっかりしなければいけないと、基本はそういうところにあるのではないかと私は思うのです。

そういう中で、では、どうしたらいいかというときに、こんな状態なのに人気があるのはなぜか、よく見られているところをどうやって評判倒れにならないように生かしたらいいかということが出てくると思うのです。そういうところで、どこに力を入れたらいいのかという話がきっと出てくると思いますので、もうちょっとそういう視点で、この現状の分析は間違いではないのだけれども、この数字は私たちが頭に描くイメージとちょっとずれているところがあるのです。道外から移入したものを道内に売ったって、札幌市の産業連関の上では商業部門のプラスになって域際収支に出てくるわけです。ですから、そういう数字だけで判断してはまずいと思うのです。やはり、北海道経済を引っ張っていく役割を果たさなければいけないと言っているわけだから、そういう役割を認識したら、力を入れなければいけない力点どころがもうちょっと出てくるかなという気がします。

座長役が余計な話をしてはまずいですね。

小仲委員 池田副会長がおっしゃっていたように、実際に我々はたくさん動いているのです。たくさんの方が、そこそこで皆さん考えて活発に動いているのです。けれども、それを集約したり、机上の数値目標だけではなくて、私は先ほど小さい例題で申し上げたので主題から外れているとおっしゃれたのかなと思いますけれども、実際には9割の中小・零細企業が一生懸命頑張っていて、いろいろなところでいろいろな活躍をしております。実際に勉強の場もあります。しかし、そこを集約しなければ産業なんて発展しません。今、この場で私は発言させていただいていますが、皆さん大きくなっていらっしゃる、頭があったりいろいろですけども、私みたいに頭もなく力もなく地べたをはいずりまわっているような中小零細企業だって一生懸命頑張っています。それらの声を大きく集約しなければ産業の発展はありません。特に、札幌、北海道、日本の国全部がそうなのですけれども、いろいろな知識やいいところ、財産が点在しています。しかし、それを線でつなぐ力がな

い、だからオンリーワンにもナンバーワンにもなれないというのが実態だと思うのです。

中小・零細が9割いるのだったら、その声をどこかで集約してまとめて官と民が車の両輪であるがごとく動かなければ無理だと思います。我々もやっています。やっていないわけではない。もちろん、官の方でもやってくださっています。そこがどこかでかみ合わないというのは、どこかで一部の声は通るけれども、本当に支えているところの声というのはなかなか集約できないのだと思うのです。私は、そこを吸い上げていただきたいということであって、私ども民間の者が努力を怠っていると、官から何かをしてくれとお願いするということではないと思うのです。実際に地域は、いろいろなことをいっぱい勉強しながら、あるいは活性化をねらいながら活動しているのが事実だと思います。その事実をどうとらえて生かしていくかが札幌市であり、北海道であり、日本のビジョンなのだと思うのです。ですから、そこを細かに吸い上げる「キカン」があってもいいと思います。「キカン」は、時期の期間と吸い上げる機関の両方のものがなければなかなかうまくいかないと思うのです。それでなければ、産業は絶対に発展しません。小さいところから重なっていくわけですから、我々がお願いするのではない、みずからやっているのです。やっているところはたくさんあります。多分、池田副会長もご存じだと思うのですけれども、食の面でも、環境の面でもたくさんあります。ただ、それが点在するだけで、つながって大きな力にならないのがすごく残念だと思うので、もうちょっと意見を吸収したり、それを取りまとめて大きな力にする、点を線で結ぶようなビジョンであってほしいなと思って私は参加させていただいています。

末端の小さな声をこの審議委員会で言わせていただいでみんなの代弁ができれば私はありがたいなと思うし、そこに自分自身も視点を当てながら審議会に参加させていただきたいと思っていますので、本当の民の小さな力の意見としてお聞きいただければありがたいと思います。

小林会長 ありがとうございます。

まだ時間がもう少しございます。せっかくの機会ですので、まだ発言なさっていない方から感想などをお聞かせいただけませんか。

大嶋委員 今、中小企業の支援団体に勤務しておりますが、この産業振興ビジョンは札幌市さんも大変だと思います。今、中小企業振興に対する方針のようなものが国の方もありますし、道もあります。ただ、今、札幌市さんは、先ほど三神委員がおっしゃった地域、北海道は画一ではないわけですから札幌市の特徴を生かしてその中で産業をどうするかという観点からこのビジョンをやるようとしているわけです。

そこで、産業振興の目的というところにあるのですが、中小企業は地域経済の大きな役割を果たしているということをよく言われますけれども、この際、それをここで再認識させる必要があるのだと思うのです。雇用の場ということもありますし、いろいろな企業の集積というか、新たな産業を生み出していく一つの苗床のような役割を果たすとか、いろいろあるわけです。

それから、先ほど池田副会長がおっしゃったように、こういう場に出てきて、経営者みずから地域振興についていろいろ発言する、これも中小企業の一つの役割なのです。ですから、産業振興の目的というか、改めて中小企業が果たしている役割を札幌市民にアピールするというのもここで必要なのだらうと思うのです。

それから、重点産業については、先ほど三神委員がおっしゃったように、札幌らしい特徴を出すために産業振興をどうするか。

それから、中小企業のいろいろな振興策ですが、これは、弱者対策というか、ある特定の業界からの甘え的な要求をここで反映させるのはよくないことです。ある程度の弱者対策も必要ですけれども、それでは地域活性化は出てこないのです。そういう観点から、札幌市の産業が今後どうあるべきかと。ただ、これは難しいことで、先ほど池田副会長がおっしゃったように、どっちの立場でこれを考えるかですね。札幌市が押しつけるわけにいかないのです。皆さん、こうしなさいよというものであってはならないわけです。したがって、今、ここにお集まりのいろいろな業界の団体から、札幌市はこうすれば産業が発展するだらう、そのためには行政はこういう支援をする、企業はどういう役割を果たすという観点でこれをまとめなければならぬだらうと思うのです。

いずれにしても、こういう振興策はいろいろ各地域でもありますし、国でも一つの方向を示しています。多分、過去には道経連とか経産局さんも北海道の産業はこういうふうにした方が望ましいというのはいろいろあるのです。しかし、あくまでも今回は札幌市の特徴、役割をどう生かすかということですから、その辺は各界の意見を伺いながらまとめなければならぬだらうと思うのです。

ものづくりにしましても、ものづくりというと、どうしても機械工業的なことを発想しますけれども、札幌市はそうではなくて、もうちょっとソフト的なものづくりという観点からやった方がいいとか、いろいろな意見が出るのだらうと思います。それをとらえてどのようにするか。

今回、この委員になりましたが、自分自身、大変なところに入り込んだなという印象です。今、そのように考えております。

小林会長 どうぞ。

古内委員 小さなスポーツ店をやっています古内と申します。

商店街の女性部の役員をやらせていただいているので、そういう立場で出なさいということだと思って、小さなお店をお父さんと2人でやっているような人たちの代表として、ちょっと意見を言わせていただきます。

札幌市、190万人もいる大きなところのことを考えなさいといっても、とても私には難しいです。実は、自分の住んでいる石山という地域が、今回、自主運営をしようということで、まちづくりビジョンをつくりました。まちづくりビジョンをつくる時に、抽象的ではなくて、もう少し具体的に物事を考えていかなかつたら、みんな頭の中でそれぞれが違ったことを考えているのですね。先ほど山下委員がおっしゃったように、共通認識を

持って、みんなの頭がこれについて考えようということではなければ、私たちのまちはどちらの方向に行くのか、それぞれの頭ではわからない。そんなことでビジョンづくりのお手伝いをしました。

それから、例えば私の小さな店でも、理念というか、それはよくわかります。とても美しい言葉を使います。地域みんなのスポーツの振興のためとか、健康な体づくりのためのお手伝いをするとか、そういうことは言うのですけれども、具体的にそのためにはどんなふうにするのかということがないと社員はついてきません。先ほど池田副会長がおっしゃったとおり、札幌市がこういうものをやりますから協力してくださいではなくて、代表として来たのだから、私たち代表の者がみんなの意見を吸い上げてきて、そして物申すと。本当に審議会というのはそういうものだと思っていたので、えっ、聞くだけなのかというふうに感じました。

ものづくりのことについては、私がスポーツ店を30年やらせてもらって感じたことですけれども、先日、札幌市の方がいらしたときにちょっとお話しさせていただきましたが、昔、札幌にもスキー屋さんがありました。物すごく有名なアジアイレブン、年配の方はご存じだと思うのですが、HAGAスキーというブランドもありました。うちの店は、うちの社長も亡くなりましたが、札幌の雪質にあった本物のスキーをつくってくれ、北海道の雪質にあったものをつくってくれ、ヨーロッパの雪ではないのだということでお話をして、みんなが外国のものしか売らないときに、地元のもの売らなければだめなのだ、そのかわり、いいものをつくってくれと、自分たち販売しているお店が頑張っていて意見を言っていかなければいけないということやってきました。少し伸びてきたのですけれども、スキーが物すごくはやっているときに、外国のものに押されてしまいました。

あとは、私がここでお願いしたかったのは、行政のこれだけの部局が一緒になってこの審議会を支えてくれるのであれば、スポーツ部で、もしスキーを札幌市が何かの就学援助でするのであれば、なるべく道産品のものを提案してほしいのです。そういうことで下支えをしてくださらないと、幾ら札幌でいろいろなことをやろうと思っても、使うものはみんな入札でどこのものでもいいのではないかということになると、伸びていけないと思います。そのかわり、つくっているところに、こんないいものをこういうふうにしてつくってほしいと意見を言うのは大事だと思います。何をつくっていても、これではだめだ、これだと負ける、それで勉強をしていただいたり、例えば工業系の大学がありますので、そういうところと一緒に勉強する場が与えられる、それが産学連携という言葉なのかなと思っています。

商店街を代表してということなものですから、言葉がすごく足りなくて申しわけないのですけれども、ふだん私が感じていることを述べさせてもらいました。ありがとうございます。

小林会長 ありがとうございます。

大変わかりやすい具体例だと思います。北海道に関係の深いスキーでも道内のメーカー

がだめになってしまうプロセス、どうしてそうなるのかということをお互い勉強すると、地元の産業振興に何が必要かというところがもっと具体的に出てくると思います。

まだご発言なさっていない方、どうぞ。

三箇委員 ものづくりについてです。前回の話の中で、食にかかわるということを重点的にという話がありました。これは、確かに原材料が北海道は豊富ですが、それにかかわるものづくりをどういうふうに進めるかということです。

私のところも金属加工、鉄工所なのですけれども、今まではほとんど公共事業のものをやっていました。ここ10年ぐらい前から、オホーツク海のホタテを採取する食にかかわるものもつくってきています。ですから、食にかかわるものを発展させていくには、やはり、その原料を運ぶ輸送の問題もあるでしょうし、容器の問題、それから販売するに当たってのデザインとか、どんどん、どんどん膨らんでくるのではないかと思います。

ただ、問題として、先ほどからも皆さんおっしゃっている中で、大量につくらないと本州や外国に持っていけないという問題です。その際、北海道から本州へ持っていくときに本州から来るよりも運賃コストが、フェリー代の分、余計にかかるという問題ですね。やはり、行政の方でもよく調べて、なぜそうなるのかということもお願いしたいと思います。

それから、ものを販売していく上におけるチャンネルをどうするかということです。北海道は、どうしても本州に比べると物を販売する営業力が非常に欠けています。その辺を皆さんは大手のところに頼んでしまうということになってしまうと、必然的に大手の傘下に入って自由がきかなくなる。そして、おまへのところはもう要らないからといって切り捨てられるというような状況にもなりかねません。ですから、北海道としてのコーディネーター役が非常に必要になるのではないかと思います。その辺のところを、今後、北海道の中で育てていくと。これは、知的なところで先ほど山下委員の方から出ましたけれども、そういうものを今の新しいメディアで宣伝していく方法もあるでしょうし、インターネットから何かいろいろあると思います。ですから、過去にとらわれなくて、今後、新しく10年間でビジョンをやっていく、これはちょっと長過ぎるのではないかと思いますのですけれども、その辺のところをうまく活用していくべきではないかなという感じを持っております。

以上です。

小林会長 ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

どうぞ。

松本委員 松本と申します。

皆さんのお話を聞いていて、なるほどと思いつつ、しかし、どこに的を絞って意見を言えばいいのか迷っております。

先ほどお話がありましたが、札幌が好きですという人は本当にいます。できることなら住みたいと。転勤族の方が、札幌に転勤でこられてすっかり札幌が気に入り、こちらで家

を建ててそのまま住まわれる方もいます。しかし、札幌が好きなのですから、仕事がない、スキルを持っているけれども、生かせないということで、道外に働きに出られる方も身近なところにたくさんいます。

では、先ほどから出ている札幌らしさとは何なのか、札幌が好きだというのはどこなのかということについてですが、もう少し具体的に項目をピックアップして、らしさを生かすためには、そして強化するためには何をしたらいいのかということを考えていったらいいと思います。

それから、ものづくりでは、私どもの会社も印刷なのでものづくりの中に入りますが、最近特に、高付加価値、差別化と盛んに叫ばれていまして、今まであったものを生かしつつ、新しいものをつくり出していくことが生き残りの手段として取り上げられています。そこで、情報収集しつつ、一生懸命考えるのですが、知恵が足りないのか、なかなか売れない現実があります。販路をうまく見つけられないというところで、大きな壁があるのですが、努力してどう花を咲かせるかということが最大の課題です。

今回は札幌の今後のビジョンをどうするかということですから、札幌のよさを改めてピックアップして、ものづくりに必要な優秀な人材を育て、道外に流出した貴重な人材を呼び戻せる状況を作るべきと思います。物をつくるにも、かなりスキルが高くないと、それこそ先ほどおっしゃった世界一、日本一になれないと思うのです。みんな努力しても力が足りないということになりますので、その辺のところは、全体で考えていただけたらと思います。

小林会長 ありがとうございます。

柴田委員、どうぞ。

柴田委員 きょうはどうもありがとうございます。

北洋銀行の柴田と申します。

ちょっと発言がしづらいいような立場もあるのですが、個人的な見解も含めてちょっとお話をさせていただきたいと思います。

銀行の立場というのは、私が言うのも何ですが、実は皆さんと全く同じで、行内でもよく銀行の経営計画をつくったりしています。地域の経済をどうしようか、自分のところのコストをどうしようか、銀行で言いますと売り上げは貸し出し、融資という形になります。今までお話を聞いていて、興味深かった面もありますし、非常に同感といいますか、非常に賛意を持った部分もあります。

個人的な印象としては、私はどさんこですし、札幌市民ですが、出身は函館です。こちらへ来てから函館のよさがよくわかって、函館の観光資源とか、食品ではイカとか、数え切れないほどのよさがあります。観光資源ですと、歴史が一番古いです。先ほどからいろいろ聞いていて、札幌は当然ながらそれ以上に可能性があるまちであり、それだけの付加価値もつけられるポテンシャルというか可能性があると思いますので、外からの声をどんどん聞いてもらった方がいいと思います。内の我々が意外と気づいていない面がいっぱいあ

って、生々しい面も気づいていないところがあります。

ですから、先ほどもちょっと出ていましたが、札幌出身者が東京で会合をやっているようなことがあれば、そういう人たちに来てもらって、札幌のファンというか、札幌の出身者として我々にハッパをかけてもらうぐらいの気持ちでいいと思うのです。

それから、私の仕事の立場から見ていると、札幌は、本州の東京、京都、大阪と比較すると、歴史が浅い分だけ、企業の方も、個人の方も、資本の蓄積はどうしても弱いという現実があります。しかし、この現実には弱みと言えは弱みですが、これをどう変えていくかということで、よく言われるのは札幌、北海道は開拓精神があるということで、フロンティア精神とよく言いますけれども、ここを少しやんちゃにやってもいいのかなと思います。北海道らしさというか、札幌らしさというのはその辺なのかなという感じを持っています。

私どもの努力不足かもしれませんが、札幌は、いわゆる起業家と言われている創業者が他の地域に比べても非常に少ないと言われています。これは何か原因があるのではないかと思います。若者が少ないのか、チャレンジ精神のある人が少ないのか、環境が悪いのか、基礎的な産業が弱いのか、いろいろあると思いますけれども、ある程度のリスクをかけた起業家が出てこないと将来へつなげていかないうような気がしております。

感想を含めまして、ちょっと一言申し上げました。

小林会長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

三神委員 札幌の基礎データというのが3ページにあります。これは、質問しようと思って忘れていたのですけれども、民営事業所7万3,000事業所とあります。これは支店が入っているのですか。本社ですか。ぜひ明確にしてほしいのです。

結局、支店経済なのです。だけど、これを入れると、今、おんぶに抱っこになっていますから、できないのですけれども、我々委員の中だけでも現状分析の中では明確に入れてほしいと思います。本州企業の支店に働く人がどのぐらいいるのか。道内はいいとして、本州から来ている事業所と働く人の分析がもしできればお願いしたいと思います。今まで私もこれはほとんどつかんでいないのですけれども、実際に考えてみると、その辺で雇用調整もされているのです。不景気になれば、結果的には、こちら側でいなくなってしまうのです。やめさせられるか本州に連れていかれるかなのです。そういうクッションの役にもなっていて、結果的には余りいい傾向になっていないです。この辺のところは我々もしっかりとらえるべきではないかと思えます。

だから、文章の中では支店経済どうのこうのとは入れられないかもしれませんが、現状分析の中で我々は見えて、それでどうするかということ为先ほど小林会長が現状分析について言っておられましたので、もう少し具体的にしてもらいたいということをお願ひします。

小林会長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

そろそろ時間かと思いますので、まだ発言されていない方、一言ぐらいいかがですか。
平本委員、どうぞ。

平本委員 北海道大学の平本でございます。

きょうが実質1回目の審議なので、やはり現状を正しく認識するという事は、委員の皆様がおっしゃっていることですけれども、大事だと思うのです。ルクセンブルグの件もそうですし、それから、例えばアイルランドが札幌市と割と似たような規模で、企業誘致をしたり、人材教育に非常に力を入れてやったり、奇跡の回復というのは本当かうそかは別として、非常にうまくいっているということが言われております。そういう海外の事例なんかは、むしろ日本国内ですと環境が違うよねという話になってしまうのですけれども、海外ですと、かえって違い過ぎる分だけ参考になるのかなという気がしております。

それから、今後、ヒアリングやアンケート調査を言うということで、アンケート調査も実効性のあるアンケート調査をというお話がありました。こんなことを言うのがいいのかどうか分かりませんが、私も自分の研究でアンケート調査をやるので、もしそういう機会があれば一緒に、お知恵をご提供するのかわからないのですけれども、多少なりともご協力できればということをお願いしました。

私は大学で研究をやっておりますので、実務家の皆様方がおっしゃる非常にリアルなことについては、そのとおりだというふうに申し上げることしかできないのですけれども、逆に客観的な立場でいろいろ意見を申し上げていければと思います。

私自身は札幌市民ですし、人生の中で札幌に一番長く、18年くらい住んでいるのですけれども、実は生まれは新潟で、父が転勤の多いサラリーマンだったもので、東京も大阪も名古屋もその他の都市も住んでおりました。そういう観点から、札幌らしさとは何なのかなとずっと考えていたのですけれども、実はきょうの2時間の間では余りよくわからなかったのです。

よく言えばドライといいますが、人間関係が地縁などで縛られていなくて意外と住みやすいということがあるのですけれども、裏を返すと、コミュニティーに意外と無関心ということがあるのかもしれない。でも、他方で、NPOの活動を見ていると、札幌発のNPOが日本で一番最初に新しい事業をやっています。NPOバンクもそうですし、市民風力発電をやっている北海道グリーンファンドもそうなのです。そういう新しい動きが札幌から出てきていると思うのです。

さらに、我々より一回り若い世代の起業家の方は非常に元気でいらっやして、そういうような方々の動きもこれからの札幌のビジョンを考える上で無視できないことではないかと思いました。

感想だけでございますけれども、以上でございます。

小林会長 ありがとうございます。

どうぞ。

大味委員 経産局の大味でございます。よろしくお願いたします。

今、私ども経産局では、農商工連携に非常に力を入れているところでございます。ここでいきますと、基本方向の外需型産業の育成というところに当たると思うのですが、この辺のことをいろいろ話しながら、先週、十勝の方で複数の町長、村長とお会いして話をしてきました。そこで彼らが言っていたことは、地域に非常にいい農産物が当然あります。ただ、地域の商工がちょっと力がないんだよねという話をしておられました。いろいろ考えてみますと、やはり商工が一番充実しているのは札幌なのだろうと思います。

先ほど、平野委員が機械の方が弱いということをおっしゃっていました。全般として見るとそうなのかもしれませんが、発寒団地だけを見ても非常に優秀な企業がたくさんございまして、これまでと全く違った観点で農業向けの機械をつくったりしているところがたくさんあるのです。そういったところを見ていくと、ここでは道央圏としての取り組みとか北海道経済の牽引役と言っておりますが、道央圏というちょっと控え目にすることもなく、もっと全道的な取り組みとして考えていって全然問題ないのではないかという感想を持っておりました。

以上です。

小林会長 ありがとうございます。

菊嶋委員 建設関係についても、きちんと議論をしていただきたいと思います。

小林会長 最後に田村委員、どうぞ。

田村委員 田村愛美税理士事務所の田村と申します。よろしく願いいたします。

ちょっと時間がないのですけれども、先ほど松本委員がおっしゃったように、私のお客様たちも、北海道、札幌に仕事がなく、やむを得ず本州に行かざるを得ないと。そうになると、行きたくもないのにどうしてもそうになってしまう。いろいろなものがそのようになれば悪循環が起こりますので、やはり、どこかで歯どめが必要かと思えます。

これは本当に一つの考え方だと思うのですが、北海道、札幌に弱い第2次産業、製造業などのものづくりを強化するというのも非常に重要だと思いますが、あえて強みを生かすということで、飲食、宿泊、サービス業などを全面的にバックアップしていって、そちらを生かすことで全体的に悪循環を改善して好循環に持っていけるような見方も一つあるのではないかと感じました。

以上でございます。

小林会長 ありがとうございます。

予定の時間となりましたので、本日の審議会は以上とさせていただきます。よろしゅうございますか。

(「異議なし」と発言する者あり)

小林会長 では、進行を事務局にお返しいたします。

3. 閉 会

事務局(井上経済局長) 本日は、短い時間ではなく長時間にわたりまして、非常にい

ろいろなご意見をいただきまして、大変ありがとうございました。

今後の作業手順でございますけれども、次回の審議会の開催は10月を予定してございます。それまでに、きょういろいろご意見をいただきましたことも含めまして、今後、ヒアリング、もしくはアンケート調査等も実施してまいりますし、内部議論も当然実施しますので、そういうことをしながらビジョンの骨格をつくりたいと思っております。その作業を進めていく中で、各委員の皆様方には素案をメールや郵送などでお送りさせていただきまして、意見をちょうだいしたいと思っておりますので、大変ご多忙の中、恐縮でございますけれども、今後とも引き続きご協力のほどをよろしくお願いいたします。

本日は、まことにありがとうございました。

以 上